

## 電子ジャーナル「看護科学研究」のさらなる発展に向けて

「看護科学研究」編集委員長 前田 樹海

1999年の創刊以来、20年余の歴史をもつ「看護科学研究」の三代目編集委員長を拝命した前田樹海と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

「大分看護科学研究」としてスタートした本誌は、2005年、「看護科学研究」に改称して現在に至るわけですが、当初から一貫して紙の冊子をもたない電子ジャーナルとして知識の社会還元を行なってきました。本誌の特長は、誰でも論文を閲覧、ダウンロードできるオープンアクセスと、誰でも論文を投稿できるオープンエントリーです。本稿ではこれら2つの「オープン」の重要性に触れつつ、本誌への今後の期待について述べたいと思います。オープンアクセスの実現には4つの条件が必要でした。

1つ目は、研究論文を、従来の物理的な組版ではなく電子的にレイアウトできるDTP (DeskTop Publishing) アプリケーションです。これは1989年のAldus Pagemaker日本語版を嚆矢に普及が進みました。次に、誰がどんな環境で閲覧しても同じものが見えるフォーマットの開発と普及です。これは現在ではPDFとして知られていますが、PDFの仕様が公開され、閲覧ソフトのAcrobatがリリースされたのが1993年です。3つ目の条件は、ネット上のPDF書類を迅速に閲覧、ダウンロードするためのブロードバンド環境です。既存のメタル回線で実現可能なブロードバンド技術であるADSLは、1999年4月に長野県伊那市で初めて接続実験が行われ、9月に長野市で有線放送電話網を利用したADSL接続サービス、12月には大分市でNTT回線網を利用したADSL接続サービスが開始されました。本誌は、研究論文の電子的配付に必要な条件が社会実装されたまさにその時にローンチしたわけです。

そして、最も重要な条件が、研究論文はオープンアクセスであるべきという信念です。

2002年から2003年にかけて、オープンソサエティ財団によるブダペストオープンアクセスイニシャティブ (BOAI)、ハワードヒューズ医学研究所によるベセスダ声明、マックスプランク研究所によるベルリン宣言と、相次いでオープンアクセスに関する声明が出され、世界的にオープンアクセスの機運が高まりました。BOAIの冒頭では、科学者が研究成果を無償で学術誌に提供することを厭わないという従来の伝統と、新しいテクノロジーであるインターネットとが融合し、査読済みの研究論文が完全に無料、無制限に電子的に配付されることで、その論文の社会的価値がさらに高まると述べています。ベルリン宣言では、"もし、その情報が社会において広く容易に利用可能でないのだとしたら、知識の普及というわれわれの使命はまだ半分しか果たせていないのだ"、と述べるに至りました。これらの声明には、研究成果は一部の学者や学会員だけのものではなく公共財であり、幅広い人々に閲覧され利用されてこそ意味があるという理念が、インターネットというインフラを得て可能になったことが見て取れます。本誌は、まさにこの理念を先取りしたと言っても過言ではありません。

しかし、現在のところ、すべての看護系学術誌がインターネットでダウンロード可能なわけではありません。たとえば、医中誌Webで「看護」と名のつく学術誌は執筆時点で471誌ありますが、オープンアクセスジャーナルを収載したデータベースのJ-STAGEで「看護」と名のつく学術誌は本誌を含めて35誌にとどまります。オープンアクセスジャーナルであるか否かは、論文のユーザビリティに大きくかわる問題であり、今後研究成果の発表の場を選択する際にますます重視される事項になると考えます。本誌は、世界の動きにも先駆けてリリースされたオープンアクセスジャーナルであればこそ、研究成果を発表する際の有力な選択肢のひとつとしてもっと認知される必要があるでしょう。

一方で、1999年は、心臓手術と肺手術の患者取り違え事件が起こり、医療安全に対する社会的関心が高まった年でもあります。ここを先途に医師によるパターンリズムの医療から、患者中心の医療へと大きな転換期を迎え、チーム医療という概念が広がる契機となり、2010年には厚生労働省によるチーム医療の推進に関する

検討会報告書が出されるに至りました。このような流れの中で、栄養サポートチーム(NST)や感染制御チーム(ICT)、緩和ケアチーム(PCT)等、職種横断的な患者サポートシステムが構築されてきたわけです。

この多職種連携時代にあって重要なのは、看護のみならずさまざまな分野とのシナジーによって得られた知識の蓄積と共有です。しかしながら、多くの看護系学会誌は、投稿者、共著者含め、すべて学会員でなければならないという縛りがあります。看護学に軸足を置く看護師や看護系大学の研究者であれば、投稿のために学会員になることはあり得るとしても、他職種の共著者に同じことを求めるのはあまり現実的ではありません。これが意味するのは、看護学の領域においては、多職種連携によってもたらされた知見を蓄積するための受け皿が決定的に不足しているということです。看護と他分野とのコラボレーションの成果がオープンエントリーを掲げる他分野の学術誌に散逸してしまうのはよしとしても、コラボレーションの発表の場がないために貴重な知見が投稿されずお蔵入りになるという事態は避けなければなりません。多職種連携時代だからこそ、本誌のようなオープンエントリージャーナルが必要なのです。

「大分看護科学研究」に端を発する本誌は、その名の通り、オープンアクセス、オープンエントリーの牽引役を果たしてきました。これらのいずれも今後ますます重要性をもつことは間違いありません。誰もが利用可能な知識を今後も蓄積、共有し続けるとともに、看護学という枠組みにとどまらず、学際的なコラボレーションの知見を幅広く集積、共有するための知的ハブとしてこれまで本誌が築いてきた役割の推進と、その役割が広く認知されるよう努力して参る所存です。

2021年4月